室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

英語の弱母音について：日本人英語学習者の指導のために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2007-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): weak vowel, schwa, unstressed, quality, Kana-transcription 作成者: 島田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/45

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

英語の弱母音について ： 日本人英語学習者の指導のために

その他（別言語等）のタイトル	On Weak Vowels in English : Towards an effective way to instruct Japanese learners of English
著者	島田　武
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	55
ページ	1-7
発行年	2005-11
URL	http://hdl.handle.net/10258/45

室工大紀要第 55 号（2005）1～7

英語の弱母音について

－日本人英語学習者の指導のために－

島田　武[*1]

On Weak Vowels in English

-Towards an effective way to instruct Japanese learners of English-

Takeshi SHIMADA

（原稿受付日　平成 17 年 5 月 23 日　　論文受理日　平成 17 年 9 月 2 日）

Abstract

This article aims to propose a method of instructing English weak vowels to Japanese learners of English pronunciation. The vowels are differently cognized by English and Japanese speakers depending on the phonetic and phonological properties of each language. When English speakers listen to weak vowels, they use their prosodic feature, stress, instead of their segmental feature, quality. In contrast what counts for the cognition of weak vowels by Japanese speakers is quality rather than stress. The differences in cognitive clue cause Japanese learners to have problems in the comprehension of English speech. The present study proposes that Japanese learners use their cognitive key, quality, and transcribe weak vowels by Kana-transcription(仮名) and that the transcription lead the learners to improve not only their listening skills but also their speaking skills through English songs.

keywords: weak vowel, schwa, unstressed, quality, Kana-transcription

---

1.　緒言

英語にはいわゆる弱母音(weak vowel)と呼ばれる母音が３種類存在する。この母音は常に強勢のない(unstressed)音節に現れる。

(1)　a.　about
　　b.　happy
　　c.　gradual

(1a)の about の語頭の母音は[ə]と表記される。英語の母音の中では、弱母音だけでなく他の母音を含めても、最も生起頻度の高いものである。そのため他の母音と異なり、schwaという特別な名前を持っ

*1　共通講座

ている。

(1b)のhappyの語末に現れている母音は通常[i]と表記される。その音質はeatやheatに含まれている母音[iː]と同じ場合もあるが、話者や方言によってはitやhitに含まれている母音[ɪ]と同じになることもある。

(1c)のgradualの[d]に後続している母音は[u]と表記される。その音質はwhoに含まれている母音とほぼ同じである。

これらの弱母音は日本人の学習者にとってそのリスニングに関して最も大きな問題点である。以下では弱母音の記述を検討し、日本人英語学習者への指導方法を探りたい。

2. [ə] schwa

英語の弱母音の中で最も典型的なものがschwaと呼ばれるものである。発音記号では[ə]と表記される。曖昧な音質を持つと言われ、曖昧母音(obscure vowel)とも呼ばれることがある。

先行研究のJones[(1)]やGimson[(2)]、竹林[(3)]などは３種類に分類している。

語頭や語中では顎の開き（もしくは舌の高さ）も舌の前後位置もちょうどすべての母音の中間に位置しているとされる。英語でneutral vowel（中性母音）[(4)]と呼ばれる所以である。また中舌母音(central vowel)の典型例でもある。以下ではJonesの分類を概観する。

[ə]の中でも最も典型的な異音は以下のような例に現れる。

(2) a. about　attend　attack
　　b. gentleman　manners　lemon　chorus
　　c. the table,　a window

それぞれ(2a)は語頭に、(2b)は語中に、そして(2c)は句中に現れる例である。

この異音が最も典型的なものであるのは、生起できる環境の制限がもっと緩いからである。(2)の例が示すその環境は「語末以外」と記述できる。

次の異音は(3)のような例に現れる。

(3) condemn,　to go,　back again,

上の例では[ə]が[k]や[g]に隣接して現れている。このような環境の[ə]は、(2)の例で見た[ə]と比較して顎の開きが小さく、舌が後ろに引かれた状態で発話される。この場合聞こえとしては日本語の「ウ」つまり[ɯ]に類似したものになる。

この異音は生起する環境が軟口蓋子音に隣接する場合のみなので、特殊なものであるといえる。しかし、後で見るように、実際の聴き取りに際しては注意が必要である。

最後に語末に生起する例を挙げる。

(4) China,　villa,　over,　manner,　bitter,　farther
　　actor,　honour,　picture,　borough,　thorough

この語末に現れる[ə]は、(2)や(3)で見た[ə]と比較すると、顎の開きが大きい異音である。またこの異音を(2)や(3)の異音と置換することができないという特徴がある。

3. [i]

英語の弱母音で[ə]についでよく現れるのが[i]である。この母音は典型的には語末の無強勢音節に現れる。

(5) easy,　happy,　money,　honey,　Sunday
　　taxi,　coffee

綴り字を見ると語末のyやey, ayが[i]に当たることが多い。また以下のような場合にも現れる。

(6) previous,　tedious,　copious
　　labial,　radial,　familial

これらの例では接辞の-iousや-ialに[i]が含まれている。音環境としては「母音の前」になる。母音に先行する[i]の例としては、接頭辞のre-やde-も含まれる。

(7) react,　reinforce,　reunite,　reorganize
　　deactivate,　deoxidize,　deice

弱母音の[i]に関しては重要なことは、音質の変動幅が広く[ə]とオーバーラップする場合があることである。

4. [u]

最後に[u]を概観する。この母音の生起位置に関しては-ualや-uousのような接辞に現れることが非常に多い。

(8) individual,　residual,　casual,　sensual,　visual
　　vacuous,　ingenuous,　congruous,　tumultuous

その他以下のような例にも現れる

(9) influence, affluence, continuance

上の(9)の例の綴り字 u に相当する音として弱母音[u]が現れる。

以上の(8)と(9)の例は学習者にとって習得が困難というものではない。しかし以下のような場合には聴き取り上の問題を生ずる場合がある。

(10) You are the boy who won the race?

上の文の"who"は[u]と発音され、本来の[hu:]とは異なっている。この現象は前置詞や関係代名詞のような機能語(function word)が「弱く」発音されるというものである。そのためこの弱められた形式を弱形(weak form)と呼ぶ。元の形は強形(strong form)と呼ばれる。

この弱形と強形の存在は英語の聴き取りの困難さの一因であり、すべての弱母音に関わっている問題である。そこで後ほど改めて触れることにする。

5. 弱母音の習得に向けて

英語における弱母音の存在は、日本人が英語の発音を習得する際の大きな問題となる。以下では発話と聴き取りの二面から考察をしていく。

5.1. 弱母音の聴き取り

英語の弱母音の聴き取りが困難であるのはまさにその「弱さ」にある。英語において強勢がある音節と強勢のない音節の強さが極端に異なっていることは、まさに英語らしさの現れである。しかし日本人学習者にとってこの英語らしさこそが母語からの隔たりを大きくする要因となっている。

(11) 日本語：各音節はアクセントの有無に関わらず、母音が明瞭に、かつ長さを保持して発音される。

(12) 英語：各音節は、強勢のあるものは、その母音が明瞭に且つ強く、長く発音されるが、強勢のないものは、弱く、短く発音される。音質は周辺の環境に影響を受ける。

(11)と(12)を比較すると日本語では母音の長さや明瞭度が保持されるのに対し、英語では強勢の有無によって長さも明瞭度も変化してしまうことが分かる。事実としてはその通りであり、英語学習を通じて必ずその事実を知らされてはいるけれども、実際に聴き取りを行ってみると、その変化に追従できない場合が多い。

ではどのようにすれば英語の弱化現象を捉えることができるのであろうか。またそれを学習者に伝えることができるだろうか。

その方法の一つは、やはり英語における弱形と強形の現象を事実として教えることである。従来は強形のみを教授して、弱形を教授する機会が少なかった。というのも、強形に関してはいわゆる辞書に載っている発音を教えれば良かったが、弱形に関しては辞書には載っていないため教えることが特に初学者に対しては困難だったからである。これは現在も変わらない。たとえ CD-ROM やインターネットの辞書を用いて音声を聴かせても、それが強形の発音であることには変わりがないからである。

そうすると残る方法は自然談話を聴かせるということになることが多い。例としては映画や音楽、またはネイティブスピーカーの発話がある。しかし実際に学習者に聴かせてみると分かるのだが、ただ聴かせるだけでは弱形を強形から区別して聴けるようにはならない。

たとえば文字資料を与えずにナチュラルスピードの音声だけを聴かせてみると皆目見当がつかないということになるし、かといって遅い音声を聴かせるとナチュラルスピードの音声をいつまで経っても聞き取れるようにはならない。

逆に文字資料を与えてしまうと文字資料に頼ってリスニングを行ってしまうので、やはり聴き取り能力が上がらないということになってしまうのである。

このジレンマを解決するためには最低限度の知識として以下のことをあらかじめ教える方が効率がよいと思われる。

(13) 英語の発話では同じ単語でも場合によって異なる発音になるものがある。

(14) a. Who is the boy that won the race?
b. He is the boy who won the race?

(15) a. Are you going to the concert?
b. What are you going to play at the concert?

(13)は既に述べた強形と弱形の違いを表している。その具体例が(14)と(15)である。

(14)では"who"という単語が疑問詞として使用された場合と関係代名詞として使用された場合に、前者は強形の[hu:]として現われるのに対し、後者は弱形の[hu]または[u]として現れると説明できる。また(15)の例を用いると、同じ"are"という単語が(15a)では[ɑ:r]として、(15b)では[ə]として現れるということを示すことができ

る。

次に必要なのが(16)である。

(16) 文字、つまり英語の正書法は実際の音を正確には反映しない。

これは(13)を含んだ主張になるが、初学者が文字に頼りがちになるのを防ぐためには是非とも必要である。また既に外来語として日本語に定着してしまった発音を矯正するためにも有益である。

(17) a. ストップ　stop　start
b. ショップ　shop　sharp
c. コーヒー　coffee　coke

(17a)では既に日本語に入っている「ストップ」という単語が"stop"の発音であると思っていると、実際の発音を聴いた場合には"start"と聞き誤るおそれがある例である。実際ある歌手のコンサートに行った時に"Everybody stop"と言って手拍子をいったん止めさせようとしたにもかかわらず誰も手拍子を止めなかったという光景に出会ったことがある。また実際に音だけを聞かせると"stop"ではなく"start"に聞き誤る学習者が多い。(17b)も同様の例である。

(17c)はよく引用される話である。飛行機に乗っている時に飲み物を尋ねられたときにコーヒーを頼んだのにコーラが出てきたという例である。これは聞き誤りの例ではないが、仮名で「カーフィ」と書き取ったことがあり"coffee"をそのまま読んでも原音とは違うと知っていれば、発音の誤りを高確率で防止できる例である。

最後に(18)を挙げる。

(18) 聞こえたとおり仮名で書き表す。

この(18)に関しては異論もあると思われる。なぜならば仮名を使ったとしても英語の音声をそのまま写し取ることができないのは英語の正書法と同じだからである。

しかしながら仮名と英語の正書法には重大な違いがある。その違いは日本人にとって決定的である。英語の正書法をそのままローマ字読みしてもネイティブスピーカーには通じないのに対し、仮名を用いれば、聴いたままの音声をおおよそ書き留めることができるし、書き取った仮名を読めば大体通じるという点が重要なのである。

日本語でさえも文語文になれば「てふてふ」と書いて「ちょうちょう」と読ませる。さらに言うと原音を書き留めたはずの現代語の「ちょうちょう」でさえも「ちょーちょー」と比べれば原音を正確には表していない。しかしながらだれも「ちょうちょう」を「てふてふ」や「ちょーちょー」に変えろと言わないのは、「ちょうちょう」と書けばそれを読むだけで元の音が復元できるからである。

仮名を使って英語の音を写すというのは、実際の発音を知らなければ読めない「てふてふ」ではなくて、少々不正確だが文字の読み方を知っていれば元の音に近いものが復元できる「ちょうちょう」を選択するのと同じである。

ただしどのように仮名を使用するのかということは使用者もしくは教授者が決定しなければならない。ここでは研究書でもある島岡丘(1994)[5]と、より実践的なハイディ矢野(2002)[6]とを挙げておく。

以下で若干の仮名表記の例を挙げる。

(19) a. copy　カーピィ
b. holiday　ハラデェイ
c. model　マーロウ
d. total　トウロウ

この例は原音とカタカナ発音の乖離が激しいものである。

(20) a. falling over　フォーリノーヴァ
b. fallen over　フォーレノーヴァ
c. put it in a pan　プリリナペェァン
d. in front of　インフラナ

この例はいわゆるリエゾンの一例である。慣れないと(20c)などはなかなか単語に分解できない。

(21) a. Can I help you?
ケナイヘオピュー
b. What are you going to do?
ワルユーゴウイントゥドゥー
c. Can you tell me where I can catch the bus?
ケニューテウミーワライカンキャッチダバス

この例は日常会話でよく聴く決まった言い方で、単語を分離しないで聴くことの方が普通の表現である。

ここでもうひとつ仮名を用いる利点を挙げておきたい。それは弱形の教授が簡単になるということである。

日本人への弱形教授の問題として、弱母音の[ə]の音質が一様でないということがある。英語のネイティブ

スピーカーにとっては[ə]の音質の変動は重要ではなく[7]、弱母音の名の通り、他の母音もしくは音節よりも弱ければ聴き取りには問題がない。むしろ発話の労力からすると、環境の変化にまかせて発話するほうが経済的になるのである。

一方日本語は弱母音を持たない。つまり母音または音節の強弱を聴き取りに使用しない言語である。この日本語をベースにした日本人学習者が英語を耳にしたとき、[ə]をどのように聴くかというと、ある単語の時には「ア」、次の単語の時には「エ」、また別の単語の時には「オ」というように音質に基づいて[ə]を聴取するのである。

ところが通常の聴き取りの指導では、[ə]は弱い「ア」と教えられる。そこで弱い「ア」だと予測できるものは聴き取れるが、それ以外の[ə]は聴き取れないと言う現象が生じる。発音記号を読めない学習者はもちろんのことだが、読める学習者にとってはかえって[ə]の記号に惑わされる危険性さえあるのである。それを防ぐため「音質の変異が大きい」ということを教えるわけだが、この文言を加えることが、直接弱母音が聴き取れるということにはつながるわけではない。

しかし仮名表記を取り入れると[ə]の音質に関する問題はすべて解決する。というのも仮名で音を写す際に音質の変異が自然に反映されるからである。つまり音質を優先して仮名表記すれば、本来は[ə]１つで表されていた複数の音が、きちんと別々の仮名に置き換えられるということになるのである。具体的な例は５．２節の歌の仮名表記や(23)の例を参照していただきたい。

以上のことを考えると、英語の聴き取りを指導する際には、学習者の母語の聴き取りの癖を熟知しているものが最適であるということになる。英語の音声を学習者が認識する際にどのように変換されるのかを知らなければ、その指導はただ母語話者の音声認識を押しつけるということになるからである。それはちょうど「[ə]の音質が英語話者にとっては重要ではないためにたった１つの記号で表されている」ということを「[ə]は日本語の弱い『ア』に相当するが音質の変異が大きい」と教えることに等しい。そうではなくて学習者、とりわけ初学者に必要なのは、学習者の耳に[ə]はどのように聞こえるかという日本人から見た音の情報なのである。

5.2. 発音の仕方－歌を用いて－

前節では仮名を用いて聴き取りの上達方法を考察した。以下では書き取った仮名を読む方法を考察する。

まず(12)で述べた英語の音声の特徴を以下に再掲する。

(22) 英語：各音節は、強勢のあるものは、その母音が明瞭に且つ強く、長く発音されるが、強勢のないものは、弱く、短く発音される。

この特徴は聴き取りのこつだけでなく、発音するときのこつも示している。特に重要なのは「強勢のあるものは長く発音される」と「強勢のないものは短く発音される」という記述である。

日本人学習者にとっては「ある音節が強い」とか「ある音節が弱い」ということよりも「ある音節が長い」または「ある音節が短い」ということの方が実感がわきやすいし、実際に知覚しやすい。というのも日本語の体系の中に長短の区別が備わっているからである。

では学習者に実際にその区別を実感させるにはどうすればよいだろうか。その一つの方法として歌を利用することが考えられる。

まず第１に英語の歌の構造として、小節の始まりには必ず強勢のある音節が生じるということがある。手拍子を打っていればどこが小節の始まりかが分かるので、その音節が強いということが意識できる。

第２番目に、さらに重要なことだが強勢のある音節に当たる音符は他の強勢のない音節の音符よりも長いものが使われる。つまり長い音が出てくればそこに強勢があるということが自然に分かるということになる。このことは仮名表記の際に長音記号「－」や母音を添えた「デェイ」のような表記を利用することによって一目瞭然となる。

第３番目としては英語の場合、歌のリズムが話し言葉のリズムとあまり変わらないということがある。このことは、歌をうまく歌えるようになれば、会話の時のイントネーションやリズムの取り方が自然に身に付くということである。

以上のようなこと考えると、歌を用いた発音指導に仮名表記を組み合わせれば、学習者の英語の発音能力の向上が見込まれる。

以下では実際の例を見てみよう。用いたのは The Carpenters の Top of the World である。この歌は軽快なリズムで明るく、早くもなく遅くもないスピードで進むため教材には最適な歌の１つである。基本的には１音符につき１つの仮名が当たるが、長い音、音の省略、そして子音の表記にはそれぞれ仮名を用いた。なお、本来の歌詞は行と連を単位として表記されており、実際に歌われる際に現れる音のつながりが切れている場合がある。本稿では、発音の指導という観点から音のつながりの方を重視してカナで表記している。そのため本来は別の行に属する部分が同じ行に現れている箇所がある。元の行の始まりは大文字で始まっているの

で、その部分を行頭にすると本来の表記に復元可能である。

TOP OF THE WORLD

Such a feelin's comin' over me
サッチャ　フィーリンズ　カーミノーヴァミー
There is wonder in most
デアリズ　ワンダリンモウスッ
everything I see
エヴリティンアイスィー
Not a cloud in the sky
ナラクラーウディンダスカーイ
Got the sun in my eyes　　And I
ガッダサーニマイアーイゼンダイ
won't be surprised if it's a dream
ウォンビーサプライズディフイッツァヂュイーム

Ev'rything I want the world to be
エヴリティンガイ　ワンダ　ワーウ　トゥビー
Is now coming true
イズナウカミントゥルー
especially for me
イスペシャリーフォーミー
And the reason is clear　　It's
エンダ　リーズニズクリー　　リッツ
because you are here
ビカージュアヒーア
You're the nearest thing to heaven
ヨーダ　ニアレスティントゥー　ヘヴン

that I've seen
ダライヴ　スィーン

I'm on the top of the world Lookin'
アイモンダ　タッポーヴダワール ルキン
down on creation And the
デャウノン クリエイションネンディ
only　　explanation　I
オウンリー　エクスプラネイショナーイ
can　find
ケーンファーイン
Is the　love　that I've　　found　　Ever
イズダ　ラーヴデライヴ　ファーウン　デヴァー
since you've been around
スィンシューヴビーヌーラウン

Your love's put me at the top of the world
ヨーラヴズプッミーアッダターポーヴダワーウ

Something in the wind has learned
サムティンインダウィンダズ　ラーンッ
my name
マイネーイム
And it's tellin' me that things are
アンニッツテリンミーダッ　ティンザ
not the same
ナッダセーイム
In the leaves on the trees　　And the
インダリーヴゾンダチュイー ザンダ
touch of the breeze
ターッチョヴダブリーズ
There's a pleasin' sense of happiness for me
デアザプリーズィンセンソヴハピネスフォーミー

There is only one wish on
デーリズオウンリーワンウィッショーン
my mind
マーイマーイン
When this day is through I
ウェンディスデイイズトゥルーアイ
hope that I will find
ホウプダライウィウファーイン
That tomorrow will be
ダットゥモーロウウッビー
Just the same for you and me
ジャスドゥセイムッ　フォユアーンミー

All I need will be mine if you are here
オーライニードゥーウビーマイニフューアーヒーァ

I'm on the top of the world Lookin'
アイモンダ　タッポーヴダワール ルキン
down on creation And the
デャウノン クリエイションネンディ
only　　explanation　I
オウンリー　エクスプラネイショナーイ
can　find
ケーンファーイン
Is the　love　that I've　　found　　Ever
イズダ　ラーヴデライヴ　ファーウン　デヴァー
since you've been around
スィンシューヴビーヌーラウン

Your love's put me at the top of the world
ヨーラヴズプッミーアッダターポーヴダワーウ

歌を仮名で転写する際の注意点は、①長い母音は必ずその長さを表記すること、②母音の発音記号にこだわらないということである。特に②は重要で、たとえ辞書では同じ発音記号が使われていたとしても、聞こえ方が違うと思ったらその聞こえ方を優先して転写することが大切である。とりわけ音質への周辺環境の与える影響が大きい弱母音にその傾向が強い。以下の例を考えてみよう。

(23) a. career　ユリィア
　　 b. recognize レキグナイズ

(23a)と(23b)の下線部の母音はどちらも弱母音で通常は同じ記号[ə]が与えられる。しかし実際の発音では前者は「オ」、後者は「イ」と聞こえることが多い。その場合はそのまま転写する方が実用に叶うと考えられる。

その結果仮名表記を見た学習者が吹き出すくらいの方が実際の音に近いことも多いのである。

6. 結び

本稿では英語の弱母音に焦点を当てて学習者への指導方法を検討してきた。英語の弱母音はその弱さ故に日本人学習者にとっては聴き取りの際の問題となる。そこで、あらかじめ弱形と強形の区別を教えておくこと、聞こえたとおり仮名で書き表すことを提案した。また発話の際の英語らしさを習得する助けとして歌を用いることを提案した。

通常教室では教わらない弱母音の性質と、弱母音が関わる弱形の振る舞いを知り、仮名文字で書き取りさらにそれを発話する訓練をすれば英語のリスニングとスピーキング能力が向上すると考えられる。

謝辞

本稿の審査の際には２名の匿名の査読者から有益なコメントをいただき、それらに留意して補訂を行った。ここに記して謝意を表したい。

文献

(1) Jones, Daniel, *An Outline of English Phonetics*, Cambridge University Press, (1960).
(2) Gimson, Alfred C, *An Introduction to the Pronunciation of English*, Edward Arnold, London, (1989).
(3) 竹林　滋，英語音声学入門，大修館書店，東京，(1982).
(4) 服部四郎, 音声学, 岩波書店, 東京, (1980).
(5) 島岡丘，中間言語の音声学，小学館プロダクション，東京, (1982).
(6) ハイディ矢野, ビジネス英語の第一歩 岩波アクティブ新書 (42)，岩波書店，東京，(2002).